

研究所だより

第463号
2023年11月14日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“ しずかな しずかな 里の秋
おせどに木の実の 落ちる夜は
ああ かあさんと ただ二人
栗の実にてます いろいろばた ”
『里の秋』 1945年(昭和20年) 童謡・抒情歌



～ 晩秋 ～

暦の上では「立冬」、「小雪」と季節は冬に移り変わっていきます。「立冬」とは、冬が始まる頃。木枯らしが吹き、木々の葉が落ち、山では初冠雪の便りが届く頃となります。「小雪」とは、雪が降り始める頃。まだ、積もるほど降らないことから、小雪といわれたようです。また、野山では木々がほんのり色付き始め、色鮮やかな紅葉が見頃を迎えています。紅葉狩りを愉しむのも一つの手ですね。

高知県は、新型コロナウイルスの流行状況について「ピークを過ぎて連続減少しているが、インフルエンザの患者は増加傾向にあるほか、例年、冬にコロナの感染が拡大することからも引き続き、こまめな手洗い、うがいなどの感染症対策を徹底してください」と呼びかけていますので、これからも基本的な感染対策を行いながら過ごしましょう。

.....
「日本教育」10月号より
～24万人時代の不登校について考える 不登校の「アセスメント」～
伊藤 美奈子
(奈良女子大学大学院生活環境科学系教授)

不登校支援の方針

不登校が日本社会で話題になり始めた1960年前後の時期には、まだ不登校に対する理解も、今ほど進んでおらず、「学校に来るのが当たり前」という価値観のもと、登校刺激を与えすぎて、状況が悪化する事態が多くあった。その後、1980年代頃までは、神経症的な不登校が中心で、登校時間になると頭痛や腹痛になり登校できない葛藤を抱える児童生徒が多くを占めた。こうした状況を理解し対応するために登校刺激に対する見直しが進み、1992年に出された文部科学省『登校拒否(不登校)問題について』では、「不登校はどの子にも起こりうる」「やみくもに登校刺激を与えるのではなく、待つことも大切」という提言が出されることになった。ところが、その後も不登校の数が増え続けると同時に、質の多様化も指摘されるようになった。そういう状況の中、「待っていてはいけないケース」も出てきたのである。

例えば、いじめから不登校になったケースや、不登校の背景に虐待が隠れているケース、発達の生きづらさによる二次障害としての不登校などは、初期対応の遅れが事態悪化を生む場合も少なくない。これらを受け、文部科学省『今後の不登校への対応の在り方について』では、「ただ何もしないで待つことは、見守っているように見えて見捨てることになってしまう場合もある」という点を踏まえ、働きかけることや関わりを持つことの重要性が指摘され

た。ただ何もせず「待つ」のでもなく、やみくもに「働きかける」のでもない。不登校児童生徒の状況や不登校となった要因・背景等を把握したうえで、適時・適切に、かつ個々の状況に応じて対応することが求められるよう変化していったといえる。



アセスメントの方法

不登校の支援を考えるために必要になるのが、不登校となる要因を的確に把握し、早期に適切な支援につなげるというアセスメントの視点である。アセスメントには、多様な方法があるが、近年、さまざまな分野で活用されているのが、1970年代にジョージ・エンゲルにより提唱された生物・心理・社会モデル(BPSモデル)である。これは、子どもたちの課題を、生物学的要因、心理学的要因、社会的要因の3観点から多角的に検討するものである。例えば、不登校の児童生徒の場合は、「生物学的要因(身体・健康面:睡眠や食事、病気や特別な教育的ニーズ等)」、「心理学的要因(心理面:学力、認知、感情、関心や意欲、社交性、ストレス、パーソナリティ等)」及び「社会的要因(社会・環境面:家庭や学校、地域の環境や人間関係等)」から、実態を把握しようとするものである。

不登校にも、従来からある友人関係や教師との関係など人間関係のこじれが背景にあるケース、発達の偏りや性的マイノリティーなどその子どもが持つ特性が背景にあるケース、虐待やヤングケアラーなど家庭側に課題を抱えているケース等さまざまある。しかも、これらの要因が複雑に絡まって不登校という形で出現していることもあるため、不登校には、多職種の目を集めた多面的なアセスメントが必要になる。できれば、不登校になる前に「チーム学校」体制を生かし、子どもたちのSOSに早期に気づくシステムが必要であろう。それには、教職員やSC(スクールカウンセラー)、SSW(スクールソーシャルワーカー)による日常的な観察に加え、アセスメントツールなどによる「見える化(=可視化)」が、文部科学省『誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策:COOLOプラン』(2023年)でも提起されている。自治体によっては、一人一台端末を利用し、子どもの心身の変化を早期にキャッチするツールの開発やアプリの活用等が進められつつある。そうしたアセスメントツールを活用することで、不登校を未然に防いだり、いじめを小さな芽のうちに解決することも可能になると期待される。他方、とくに思春期にもなると、自分のこのころの裡を人に話すことには抵抗を感じる子どもも少なくない。そのため、子どもたちが自らの心身の不調を正直に伝えたいようになるように、普段から教師と児童生徒との関係性(先生に話したらなんとかなるという信頼感や、先生は自分のことをわかってくれるという安心感など)を築くことが求められる。さらには、SOSが発信されたときに、すぐに対応できる教育相談体制が構築されていることも不登校の未然防止には不可欠な要素である。

他方、学校を休み始めたケースに対しては、なるべく早期のうちに具体的な次の一歩を考えるための「ケース会議(支援会議)」を持つことが有効となる。管理職や担任教師、養護教諭やSC、SSWなどが構成メンバーとなり、コーディネーターを中心に、当該児童生徒の情報共有をすると同時に、今後の支援の方向性を検討することが主たる目的となる。このケース会議は、1回で終わりではなく、必要に応じて随時、計画的に行う必要がある。そのための情報の一つになるのが、先述のアセスメント結果や、個々の児童生徒についての情報が書かれた個別の支援計画シート(アセスメントに基づくプランニングを行い、具体的な支援策を明示するために作成されるもの)の活用であろう。



まとめにかえて

最後に、不登校をアセスメントする際、その病理的側面やマイナス要因だけでなく、その子の強みやプラスに働き得る資質や特性などにも注目する必要がある。不登校という形で表れてはいるが、その現象のみに縛られず、“その子自身を理解する”という点に留意したアセスメントの実現が大切である。

<第73次土佐清水市教育研究集会・半日教研>

11月 1日(水)に半日教研が開催されました。それぞれの部会で研究授業・研究協議や講師を招聘しての研修、日々の実践交流等ができたものと思われます。
各部会の研修(公開授業・研究協議等)の様子を紹介します。

〔国語部会〕

「パラリンピックについて調べよう」

清水小学校3-1

授業者：川村 碧人 先生

研究協議・実践交流

- ・単元計画の作成
- ・タブレットの活用等



〔社会科部会〕

「ジョン万学習」

清水中学校1-1

授業者：松田 光世・下打 健生先生

講師：田村 公利 氏(市史編纂室)

研究協議・情報交換

- ・ICTを取り入れた授業作り
- ・ジョン万学習の教材化等



〔算数・数学部会〕

「4章 比例と反比例」

清水中学校1-2

授業者：上岡 栄二 先生

研究協議・情報交換

- ・小中の流れ、付けておきたい力
- ・ICTの活用等



〔理科〕

「動物の体のつくりとはたらき」

清水中学校2-2

授業者：三井 優子 先生

講師：小谷野 竜介指導主事

(西部教育事務所)

土井 恵治氏・森口 夏季氏・富永 紘平氏

(ジオパーク専門員)

研究協議・情報交換

授業についての協議他



〔外国語〕

「授業づくり講座(6/23)」の研究授業について

・授業ビデオ視聴

・研究協議

板書づくり：大事な言葉だけ残す

単元づくり：相手意識を働かせることができるようにする

アクティビティづくり

英語しりとり・アルファベットかるた

伝言ゲームなど